

栄えある文化奨励賞を受賞！ 国画会会員・白石一徳さん（四十八歳）

今年、栃木県文化協会の文化奨励賞を受賞した国画会会員の白石一徳さんは、文星芸大附属高校の教諭で、これからの県内洋画会を背負って立つ逸材として注目を浴びています。そんな白石さんにお話を伺いました。

●美術の道に進んだきっかけは？

高校の美術の先生との出会いがきっかけで、宇都宮大学に入学してから本格的に油絵の勉強を始めました。

恩師の田代基一郎教授に指導していただく中で絵画表現の多様さや油絵の奥深さを学びました。田代教授は、東京芸大からフランスの国立高等美術学校で学ばれた方で、現在も「国展」を中心に指導いただいています。



白石さんのアトリエ

●赤色を基調とされているようですが

自分の表現を模索していく中で、必然的に赤色を多く使うようになってきました。赤と言ってもたくさんの色があり、現在はカドミウムレッド、プルやカーマインなど赤紫系統を基調として描くことが多いですね。赤はすごく力強くて生命のエネルギーを感じさせる色だと思っています。

赤色のみならず油絵具にはさまざまな個性があり、組み合わせは無限です。特有の透明感を生かして絵具を何層にも塗り重ねることに、混色では得られない複雑で深みのある色彩表現を試みています。そのような中で色同士の重なりによって思いがけず美しい色に出会うこともあります。

●苦労していることは

日々多忙な中で、制作時間を確保することです。絵に集中できるのは大体深夜になってしまいます。また、油絵具は乾燥に時間がかかるので、着想段階でのテーマやイメージ



第91回国展2017「ガランスの揺曳」
（ガランスはフランス語で茜色の意）

を完成まで持続させることがなかなか難しいですね。オリジナリティーを大切に作品を創造しなければなりません。実際には試行錯誤の連続でイメージ通りにならな

●今後の予定は

毎年五月に国立新美術館で行われる「国展」に出品していますが、名古屋や大阪で発表する機会もいただいています。

県内では、宇都宮を中心に、国展関係のグループ展や栃木県新作家集団展などを定期的に開催しています。また、十一月には、八年ぶりに宇都宮で個展を開催する予定です。ぜひご覧ください。（T・S）

矢板市に初の林業女子誕生！ 高原林業企業組合・早乙女愛海さん（十九歳）

ダンブカーの運転手が女性、なんていうことは今では全く珍しいことではありませんよね。ついに林業の分野にも女性ワーカーが誕生しました。しかも彼女は十九歳になったばかり。今日は高原林業企業組合に勤める林業女子・早乙女愛海さんにお話を伺いました。

●この職場を選んだ理由は

林業に関心があり、高校では環境緑地科の林業コースで学びました。二年生の時の職場体験で、数カ所訪問してチェーンソーの取り扱いや伐倒の講習を受けましたが、この雰囲気が大変よかつた。

●毎日のような気持ちで取り組まれていますか

まず「安全」を心掛けています。職場は山の中なので、携帯電話は通じませんし、けがをしても病院にはすぐには行けませんから。

●将来の夢をお聞かせください。

どんな仕事でもできるようなこと、地域のオペレーターとして「この人がいなければ」「この人ではいけない」という存在感を持つことが夢です。また、空師（特殊伐

●男性だけの職場ですが

どうしても体力では負けてしまっていますが、お荷物にはなりたくないと頑張っています。

職業体験がきっかけで出会い、「林業って楽しい」と笑顔で話していた彼女が、まさか自社に就職するとは思いませんでした。若い女性を雇用したことがなかったのに、驚きと不安がありました。彼女が、彼女のやる気・集中力はほかの職員にも劣りませんし、社内

の雰囲気も明るくなり、入社してくれてうれしく思っています。将来は重機オペレーターとして活躍できる存在に育てたいと考えています。（T・S）

